

横井小楠と『書経』  
—なぜ「二典三謨」の篇を重んじたのか—

北野雄士

Yokoi Shōnan and *Shokyō*:  
Why the Chapters of “*Nitensanbo*” are Emphasized  
in his Political Thought?

KITANO Yuji

**Abstract**

Yokoi Shōnan (1809-1869), a Confucian scholar and samurai active in the late Tokugawa period, undertook an intensive study of Chu Hsi's Neoconfucianism in his early thirties and formulated the idea of “Sandai” (the Three Dynasties, i.e., the Hsia, the Yin and the Chou in ancient China) as the standard for good government.

In the first half of his forties, he recognized through his experiences the great influence of a monarch's spirit on the politics of Japan, for example, the conflicts among the samurai factions in Higo (Kumamoto) domain, and through the historical study of Godaigo Tenno (emperor) and his misrule in the medieval period. He then began to advocate the spirit and behavior of Yao and Shun, the mythical emperors before the Three Dynasties, as an ideal image of a sage monarch. The lives of Yao and Shun are recorded in the chapters of “*Nitensanbo*,” i.e., the “*Canon of Yao*,” the “*Canon of Shun*,” the “*Counsels of the Great Yu*,” the “*Counsels of Kaou-Yaou*,” and “*Yih and Tseih*,” compiled in the *Shokyō* (*Book of Documents*).

This paper attempts to examine why he emphasized the importance of the “*Nitensanbo*”

---

平成26年10月31日 原稿受理  
大阪産業大学 人間環境学部 教授

chapters as the source of his political thought. Then I considered the characteristics of these chapters.

From my examination, I point out that the chapters held universal and democratic principles, for example, open and friendly discussions between a monarch and his vassals, the selection of a monarch based on his virtue and faculty as a leader, and promotion and encouragement of industry for the welfare of the common people.

These principles met the necessity for immediate acceptance of European civilization in the last days of the Tokugawa shogunate. Therefore he attached great importance to the chapters of the “*Nitensanbo*” and emphasized their significance as the source and standard in his political thinking.

はじめに

横井小楠は慶応3年(1867)59歳の年の6月、アメリカに海軍修業のために留学している二人の甥に出した手紙の中で、そちらで西洋列国が「利の一途に馳せ一切義理のない」<sup>1)</sup>有り様を見聞して、『書経』の「二典三謨」の諸篇や熊沢蕃山の書をますます「信仰」するようになったそうだが、私も熊本で弟子とその二著のみ講習していると述べている。この手紙の後半では、アメリカを含む西洋列国が富国強兵、機械化に励むだけで、学校で徳性を磨くことをおろそかにしているというくだりがあり、「利の一途に馳せ一切義理のない」ことの内容を推しはかることができる。

小楠が弟子と読んでいた二著のうち、熊沢蕃山の方は、小楠が長年愛読していた『集義和書』<sup>2)</sup>であろう。小楠は少なくとも20代後半より蕃山に私淑し<sup>3)</sup>、蕃山の『集義和書』に見られる実践的な仁政論に共鳴していた。

1) 山崎正董『横井小楠 下巻 遺稿篇』, 明治書院, 1938年(以下『遺稿篇』と略記する), 508頁。

2) 拙稿「横井小楠による水戸学批判と蕃山講読一誠意の工夫論を巡って」『横井小楠研究会年報』, 第2号, 2004年。為政者が農政や治水の知識をもって仁政を実践すべきだと説く『集義和書』の主張は、帝王による積極的な国土開発、治水・治山などの事業を描く『書経』二典三謨の篇の内容と通じあっている。

3) 小楠は江戸遊学中の天保10年(1839年)31歳の年に水戸藩の藤田東湖に会い、その時の話し合いの印象を、まるで蕃山の『集義和書』『集義外書』を読むように冷静なものであったと漢詩に詠んでいる。小楠は後に『集義外書』を蕃山の著書ではないのではないかと疑っているが、『集義和書』は生涯に渡って愛読した。『遺稿篇』, 863頁。野口宗親『横井小楠漢詩文全釈』, 熊本出版文化会館, 2011年(以下『漢詩文全釈』と略記する), 64-65頁参照。

もう一つの『書経』<sup>4)</sup>は古くは『書』、『尚書』と呼ばれてきた経書であり、後に五経の一つに数えられるようになった。『書経』は夏王朝以前の神話的帝王である堯や舜の物語、神話的帝王であり夏王朝の開祖とされる禹の治山・治水事業、殷(商)の開祖湯王の誓言、周の初期の帝王である成王や成王の有力な後見役であった周公<sup>5)</sup>が家臣や諸侯に与えた訓戒や誓言、成王と周公の問答などを集めたものである。本論文は赤塚忠<sup>6)</sup>に従って、『書経』の諸篇のうち、堯と舜のいわゆる「唐虞」の時代及び夏王朝の部分を「虞夏書」と呼んでいる。従って『書経』は「虞夏書」、殷(商)の部分の「商書」、周の部分の「周書」の三部から構成されることになる。

「二典三謨」は「虞夏書」の冒頭に収められている、堯典、舜典、大禹謨、皇陶謨、益禘の5篇を指す。この5篇は古代中国の神話的帝王である、堯、舜とそれぞれの臣下の言行を描き、それを通じて為政者の理想的な姿を示そうとしたものである。

従来の研究は小楠と『書経』の関係について、(1)小楠が『書経』特に二典三謨の諸篇を、「堯舜三代の道統」<sup>7)</sup>という自らの政治理念の根拠としていたことを指摘し、(2)小楠の「堯舜三代の道統」論の特質は何か、(3)なぜ『書経』を政治理念の根拠としたのかという問題を論じてきた。

この三点に関する研究者の見解と筆者の考え方をまとめてみよう。

- 
- 4) 小楠が読んだ『書経』は漢代以後に偽作された篇も含む『孔安国伝尚書』に基づくものである。小楠は『書経』の注釈としては、おそらく蔡沈の『書集伝』が他と比べて一番よいと述べている(『遺稿篇』, 127頁)。蔡沈は朱子の弟子であり、最晩年の朱子の命を受けて『書経』に注を付けた。これが『書集伝』である。蔡沈の「書経集伝序」によれば、最初の堯典、舜典、大禹謨の三篇は朱子の校閲を経たものである。蔡沈の注は朱子学の立場で付けられている。小楠は『書集伝』大禹謨篇の注をそのまま朱子の思想と受けとっている場合がある(『遺稿篇』, 903頁)。
  - 5) 周の文王の子、武王の弟。姓は姫、名は旦。
  - 6) 赤塚忠訳注『書経・易经(抄)』(中国古典文学大系1)、平凡社、1972年(以下赤塚訳注『書経』と略記する)、6-7頁。
  - 7) 『遺稿篇』, 901頁。小楠が「堯舜三代」と言う時、三代は夏、殷、周の三王朝を指している。但し、小楠が三代という言葉を使う時には、三代以前の堯や舜の時代も含む聖人によって理想政治が行われた時代の意味で用いることもある(例えば、『遺稿篇』, 839頁)。例えば、嘉永5年(1852)に書かれた「学校問答書」では「三代の際に道が行われているときには」と述べて、堯の時代に君臣の間で政治を巡って活発な議論が行われている様子を好ましいものとして描いている(『遺稿篇』, 4頁)。慶応元年の「沼山閑話」では最初に「堯舜三代」という言葉を何回か使い、その後はそれを受けて堯舜を省いた「三代」という言葉を使っている(『遺稿篇』, 922-924頁)。小楠は「堯舜三代」を「三代の治教」(『遺稿篇』, 40頁)、「三代の道」(『遺稿篇』, 91頁)、「三代の治道」(『遺稿篇』, 603, 924頁)など様々な言い換えている。また三代及びそれ以前の堯や舜の時代も含めて「三代以上」という表現を使うこともある(『遺稿篇』839頁)。筆者も小楠に従い堯舜の時代も含めて三代の理念という言葉を使っている。

まず、(1)については多くの研究者<sup>8)</sup>が指摘しており、小楠が残した漢詩<sup>9)</sup>、文章<sup>10)</sup>、談話を見ても明らかである。

次に、(2)の「堯舜三代の道統」論の特質について、研究者は次のように論じている。すなわち、小楠が聖人とされる堯や舜など古代の帝王を「政治の主体」として把握し、彼らが何を目指しどのように行動したかを知ることによって現在の課題に取り組もうとしたこと<sup>11)</sup>(平石直昭, 沼田哲, 源了圓), 為政者に対して天を恐れ民を安んずることを要請する抽象度の高い政治理念であるため幕末の情勢の急変に柔軟に対応できたこと<sup>12)</sup>(源了圓), 小楠は30代半ばの天保13, 14年頃には政治はあくまでも三代の理想政治を目指すべきだという思想を提唱し、その後40代後半に西洋文明に触れた時も『書経』を読み返し、三代の政治を西洋の政治と重ね合わせることによって、幕政を批判し、ゆらぐことなく幕末の政治状況に対応できたこと<sup>13)</sup>(野口宗親), 以上のような議論が行われている。

このような見解は小楠の「堯舜三代の道統」論に対して、政治主体としての聖人論、発想の柔軟性、堯舜三代と西洋を重ね合わせる発想という異なる視点から光を当てており、いずれも妥当なものである。

なぜ『書経』を政治理念の根拠としたのかという(3)の問題については、松浦が『横井小楠<増補版>』の補論<sup>14)</sup>の中で、次のように述べている。小楠は西洋文明に衝撃を受けたとき、朱子学の応用ではそれに対抗するのは無理だと感じ、三代の学に自由な発想を助けるものを求めた。実際には『書経』の時代のような古いところに解決の鍵などありはしないと考えていたが、小楠は儒学者であり儒学の古典に解決を求めた。

このような松浦の見方のうち、小楠が朱子学では西洋文明に対抗できず三代の学による

8) 例えば、後述する源了圓の論文、松浦玲の小楠伝、沼田哲の論文、野口宗親の論文参照。

9) 『漢詩文全釈』, 181-189, 190-195, 196-197, 214-216頁。

10) 『遺稿篇』, 38, 901, 903-904, 922-923頁。

11) 平石直昭「主体・天理・天帝(一)―横井小楠の政治思想―」『社会科学研究』東京大学社会科学研究所紀要第25巻, 第5号, 1974年, 51-55頁。沼田哲「「仁」と「三代之道」―横井小楠思想の特質についての一考察―」『日本歴史』332号, 1976年, 50-51頁。源了圓「横井小楠の「三代の学」における基本的概念の検討」『国際基督教大学学報Ⅲ―A アジア文化研究別冊 2 伝統と近代化』, 1990年, 43-47頁。

12) 源了圓「明治維新と実学思想」(坂田吉雄篇『明治維新史の問題点』, 未来社, 1962年所収), 73頁。

13) 野口宗親「横井小楠の「沼山閑居雑詩」について」『熊本大学教育学部紀要』人文科学, 第56号, 2007年11月, 317, 322-323頁。この論文では、小楠は西洋文明に触れて初めて堯舜三代に目を向けたわけではなく、西洋文明に出会う前にすでに三代の思想を形成しており、堯舜時代の王室のあり方を理想としていたという重要な指摘がなされている。

14) 松浦玲『横井小楠<増補版>儒教的正義とは何か』, 朝日新聞社(朝日選書), 2000年, 362頁。同著者『横井小楠』, 筑摩書房(ちくま学芸文庫), 2010年, 403頁。

ほかないと考えたという前半の部分は、殖産興業、国土の開発、交易などの経済政策については確かにその通りである。

古い時代に解決の鍵はないと考えていたという松浦の後半の見解について、本論文の以下の論述を先取りすれば、次のように反論できる<sup>15)</sup>。小楠にとって『書経』は堯や舜など古代の聖人の「氣象」<sup>16)</sup>を体得するための書であり、その仁政思想は心から「合点」<sup>17)</sup>され体得されていたと考えられる。従って、小楠は儒学者だから便宜的に『書経』に解決を求めたわけではなく、本気で堯や舜の精神に則って幕末の政治状況に対処しようとしていたのである。

小楠はなぜ『書経』を根拠にしたのかという(3)の問題をさらに進めれば、小楠はなぜ『書経』のうちで特に二典三謨の篇を重視したのかという、これまで論じられてこなかった問題が浮上する。この問題が本論文のテーマである。

この問題に対しては、とりあえず二典三謨には小楠がその「氣象」を身につけて模範にしたいと考える堯、舜が登場するからと答えることができる。ではなぜ二典三謨で描かれた堯、舜を模範にしたいと考えたのかが問われなければならない。そのことが分かって初めて、小楠が『書経』の二典三謨の諸篇を重視した理由を説明することができよう。

その際役立ちそうなのは、二典三謨の諸篇が『書経』の中で内容的にどのような位置にあり、どのような特質をもっているのかを知ることである。そこで本論文では、論述の途中(第二章)で小楠から一時離れて『書経』というテキストに遡り、『書経』における二典三謨の位置と内容を考察する。この作業によって、後述するように西洋文明にも通じる普遍的で開かれた政治理念が二典三謨の諸篇に含まれていることが明らかになる。

本論は次のように構成される。まず第一章では、小楠が生涯に渡ってどのように二典三謨を取り上げているか、その変遷を概観する。次に第二章は、小楠からいったん離れ、『書経』がどのような経書であり、二典三謨が『書経』の中でどのような特質をもっているのかを論じる。その上で第三章では、改めてなぜ小楠は二典三謨の篇を重んじたのか、なぜ堯、舜を模範にしようとしたのかを考察する。最後に結論で以上の議論をまとめたい。

---

15) 本文中の(3)の問題に関連して、筆者は『書経』には、民衆の福利を重んじる仁政思想、血縁にとらわれずに為政者を選ぶべきであるという思想、高度な治水技術や農業技術、地域間の交易の促進などが含まれているため、小楠にとって『書経』は西洋文明を摂取する際の重要な媒介になったと論じたことがある。拙稿「横井小楠と福沢諭吉における文明論と政策論」『大阪産業大学論集』人文科学編, 99号, 1999年, 6頁。

16) 『遺稿篇』, 239-240頁。

17) 『遺稿篇』, 899頁。

## 第一章 小楠と二典三謨 ―その取り上げ方の変遷

本章では、小楠がどのように『書経』二典三謨の諸篇に言及しているか、その変遷を、小楠の生涯と関連させながらたどってみたい。

## 第一節 30代における三代理念の形成

小楠は8歳の頃より藩校時習館で儒学を学び始め<sup>18)</sup>、学問と武芸に精励して29歳の年に時習館最上級クラスの居寮長（チューター）になっている。居寮長の当時小楠が重視していたのは経書を研究する経学よりは史学であり、和漢の歴史を読み「古今治乱興廢」<sup>19)</sup>を洞察して「経国」に役立つことを説いていた。儒学の学派間の分裂、派閥抗争の問題、農民の窮乏など現実の問題に取り組むために、本気で儒学特に朱子学の学び直しを行ったのは後述するように、江戸遊学から帰国後の30代前半である。

小楠は江戸遊学中の天保10年（1839）31歳の年の年末、酒に酔って幕府御家人と喧嘩するという事件を起こし、遊学を切り上げて帰国せざるを得なくなった。天保11年（1840）4月に帰藩すると、藩から逼塞の処分を受けた。小楠は処分に服し、儒学の学び直しを行い、朱子学に傾倒するようになった。

小楠は学問に励みながら藩政に目を向け、肥後藩の歴史を調べた。そのうちに、藩が第8代藩主細川重賢による宝暦の改革以降、領民の福利よりも藩の財政的な利害を追求してきたことを知り、天保13年（1842）頃藩政改革論<sup>20)</sup>を起草した。この改革論は例えば、藩の色々な部局が領民や藩士に金を貸し付けて利子を取る制度を、士民を困窮させる「貨殖の利政」<sup>21)</sup>として批判し、その廃止を主張している。他にも士民の奢侈の抑制、藩による臨時課税の廃止、都市人口の削減、商人の統制などが提案されている。さらに台風が天保14年（1843）9月に肥後の海岸部に襲来し大災害になったときには、民衆の立場に立って藩による救済を求める漢詩<sup>22)</sup>を詠んでいる。このように天保13、14年頃から、小楠は藩の失政や災害による民衆の窮乏化という現実を真剣に受けとめ、孟子の仁政思想<sup>23)</sup>に

18) 山崎正董編『横井小楠 上巻 伝記篇』、明治書院、1938年（以下『伝記篇』と略記する）、36、1253-1259頁。

19) 元田永孚「還暦の記」（元田竹彦・海後宗臣編『元田永孚文書』第1巻、元田文書研究会、1969年所収）、21頁。

20) 『遺稿篇』、65-79頁。

21) 『遺稿篇』、73頁。

22) 『漢詩文全釈』、123-125頁。

23) 小楠が『孟子』から受けた影響については次の二論文がある。野口宗親「横井小楠の「感懐」詩について」『熊本大学教育学部紀要』人文科学、第55号、2006年11月、225-226頁。拙稿「人に忍びざるの政」を目指して―横井小楠の政策論と『孟子』引用」『大阪産業大学人間環境学論集』、9号、

基づいて民を安んじる政治の実現を目指すようになった。

同じ頃、小楠もその一人である、肥後藩の改革派（いわゆる実学党）の藩士は頻りに集まって、朱子が入門者のために北宋の儒者の文章や語録を集めた『近思録』などを会読した。議論は語句の解釈にとどまらず、肥後藩や幕府の政治にも及んだ。小楠は『近思録』<sup>24)</sup>や朱子の著作から、学問が己の修養のための学であることを強調する「為己の学」<sup>25)</sup>の思想、政治は堯や舜及び夏、殷、周の三代の聖賢による統治を目指すべきだとする三代の理念、修己治人の実践を重んじる思想などを受容している。

天保14年（1843）11月に書かれた「見聞私記の後に題す」<sup>26)</sup>という文章（原漢文）は、その7年前に21歳で早世した長州萩藩の第12代藩主毛利斉広<sup>なりとう</sup>の伝記を読んだ感想である。この感想文によって当時の小楠の思想をうかがうことができる。小楠によれば、毛利斉広は若年ながら家庭生活から始めて修己治人を実践し、三代の政治を目指しており、江戸時代で同じような人物を探せば第10代米沢藩主の上杉鷹山（治憲）だけである。

内容上、同志と『近思録』などを会読していた時期に書かれたものと推定される文章に「諸葛武侯伝を読む」<sup>27)</sup>（原漢文）がある。これは、中国の三国時代の軍師諸葛孔明を、三代以後では最も模範とすべき俊傑であると称賛している。

当時の小楠は三代の理念を提唱する際に、堯、舜や三代の帝王や聖賢ではなく、前述した日本の大名や中国の賢臣を挙げている。このことは当時小楠がまだ堯、舜や三代の帝王や聖賢の精神や行動を、生き生きとしたイメージで描けていなかったことを推測させる。

## 第二節 堯、舜の行動規範に基づく三代理念の確立

政治的な意味で実学党の中心人物であり、家老であった長岡監物は弘化3年（1846）、3年前に藩主により藩に礼讓の新風を起せと委任された、「文武芸倡方」という役を免ぜられ、さらに翌年家老職を辞して失脚した<sup>28)</sup>。実学党の藩政改革は失敗に終わった。

小楠は藩の保守派から睨まれていただけでなく、監物の家臣からも当主の失脚の元凶と責められるようになった。小楠が江戸遊学時に酒失事件によって帰国、逼塞といふかなり重い処分を受けた背景にも保守派と改革派の対立が影を落としている。小楠は逆風の中、

---

2010年、23-40頁。

24) 小楠が『近思録』から受けた影響については次の論文で詳説した。拙稿「横井小楠と『近思録』—「三代」理念の受容を巡って—」『大阪産業大学論集』人文・社会科学編、19号、2013年、83-104頁。

25) 前掲拙稿「横井小楠による水戸学批判と蕃山講読—誠意の工夫論を巡って」、11頁。

26) 『漢詩文全釈』、453-457頁。

27) 『漢詩文全釈』、435-438頁。

28) 『伝記篇』、106-111、1263頁。

私塾で弟子と講学する日々を送ることになった。

小楠はおそらくこの講学の時期に「南朝史稿」<sup>29)</sup> という編年体の歴史書の執筆を試みている。未完に終わった「南朝史稿」は、後醍醐天皇が元弘3年(1333)に権力を掌握することに成功したものの(建武の新政)、その後の失政によって天皇に忠義な親王、側近、武士を死に追いやってゆく有様を描いたものである。この史稿の狙いは、建武の新政前後における後醍醐天皇と忠臣たちの事績を叙述することによって、人君の一心の在り方<sup>30)</sup>の重要性を明らかにすることにあつた。

小楠は嘉永3年(1850)6月、徳川斉昭のブレインの一人で当時水戸にいた藤田東湖に手紙<sup>31)</sup>を出し、江戸留学以来の無沙汰を詫びた上で、近年の情勢から判断して外夷との戦争が起きる可能性が高いことを指摘し、水戸藩が早くから「外夷来寇之憂」<sup>32)</sup>を警告していたことをたたえて、藩主の徳川斉昭による幕政の刷新に期待を寄せている。

この手紙はまた、和漢古今「朋党之禍」<sup>33)</sup>が絶えないこと、君上の一心が頼みの綱であるが、よほどの君主でなければ「朋党之禍」に対応できないと述べている。

肥後藩士における保守派・革新派の間の対立、後述する「上国遊歴」中の様々な経験、「南朝史稿」の著述などを通じて、治乱を左右する「人君の一心」の重要性に対する認識が小楠の中で深まっていった。

熊本で実学党が藩政改革を試み挫折した頃、国際情勢は次第に日本に緊張を強いるものになった。天保13年(1842)清朝がアヘン戦争でイギリスに敗れて南京条約を結んだという情報はすぐに日本にもたらされた。またこの頃より日本近海に欧米の艦船が頻繁に出没するようになる。弘化年間(1844-1847)、さらにそれに続く嘉永元年から3年にかけて(1848-1850)、イギリス船、フランス船、アメリカ船などが琉球や日本の沿岸部にやってきた。嘉永3年にはオランダからアメリカの対日通商要求が幕府に伝えられた。

29) 拙稿「横井小楠と『南朝史稿』—「一心之公私」論による後醍醐天皇批判」『横井小楠と変革期思想研究』第5号、2010年7月、50-67頁。「南朝史稿」の執筆時期は確定できないが、後述する、嘉永3年(1850)6月に書かれた藤田東湖宛の書簡の記述(『遺稿篇』、145頁)から、嘉永3年(1850)及びその前の数年間と考えられる。

30) 小楠は、この史稿冒頭の頭注において、北島親房の『神皇正統記』の後鳥羽帝紀の巻を読むたびに、筆者の親房が、後鳥羽帝の軽挙妄動によって人心が天皇家から離れ、天下が武人の北条氏に帰したことを責めていることに共感し嘆かないことはないかと述べ、さらにこのことを後の後醍醐天皇にあてはめて、人君の一心の公私によって治と乱が分かれることは同じであり、人君は慎まなければならないとその感慨を記している。この小楠の自注は野口宗親によって解説されている(『漢詩文全釈』、546頁)。

31) 『遺稿篇』、142-147頁

32) 『遺稿篇』、144頁。

33) 『遺稿篇』、143頁



このような対外的危機の高まりの中で、小楠は嘉永4年(1851)42歳の年に約6カ月間熊本から名古屋、福井に及ぶ「上国遊歴」<sup>34)</sup>を行い、途中で立ち寄った各藩の政治、教育、民情を観察し、それぞれの土地の武士や儒者と交流した。

出発後立ち寄った各藩(但し柳川藩から紀州藩まで)に関する見聞記「遊歴聞見書」<sup>35)</sup>が残されている。それを読むと、小楠にとって思想的に重要だったと思われるのは岡山での見聞<sup>36)</sup>で、17世紀に備前岡山藩の基礎を築いた藩主池田光政の治水事業や儒教による文治政策が今に残している遺風に直接触れたことである。その時小楠は名君が死後にまでも及ぼす大きな影響力に感心している。池田光政の事績に触れたことも「人君の一心」の重要性を確信する契機の一つになったと考えられる。

遊歴の際に福井<sup>37)</sup>に立ち寄って越前藩の儒者や藩士と親しく交流したことは思想の上でも経歴の上でもその後の小楠に大きな影響を与えた。越前藩士との個人的、思想的交流はその後も続き、越前藩政に関わる重要な問題を相談されるようになっていく。

小楠は30代半ばに提唱した三代理念を生涯信奉した。しかし、三代理念の内実は遊歴後に変化している。その変化とは、『書経』に描かれた、堯、舜、禹などの神話的帝王の治政の在り方に基づいて、肥後藩や越前藩の藩政、さらには幕政について様々な提言を行うようになったことである。このように変貌した三代理念は61歳の年に暗殺されるまで保持されている。

新しい三代理念に基づく政策論の最初の例が、嘉永5年(1852)3月に書かれた「学校問答書」<sup>38)</sup>である。これは、越前藩での藩校設立の是非を巡る越前藩士からの問い合わせに対して小楠が問答体の形式で回答したものである。この文書は新しい三代理念による政策論の原型とも言えるものである。

小楠はまず、漢・唐以来の中国や日本の古今の学校から「出類の人才」<sup>39)</sup>が出たためしがないと指摘する。小楠によれば、人君が「人才を生育し政事の有用に用」<sup>40)</sup>いようと功利的な動機で学校を創ると、学生が己の修養のための学問という根本を忘れて互いに反目し、甚だしい場合には学校が喧嘩の場所になってしまう「人才の利政」<sup>41)</sup>というべき逆説

34) この旅行の詳細は『伝記篇』, 153-251頁参照。

35) 『遺稿篇』, 823-845頁。

36) 『遺稿篇』, 838-841頁。

37) 『伝記篇』, 213-216頁。

38) 『遺稿篇』, 1-7頁。

39) 『遺稿篇』, 1頁。

40) 『遺稿篇』, 3頁。

41) 『遺稿篇』, 3頁。

が生じる。その原因は人君に身を修めるといふ本がなく、治を求める心ばかりがはやり、学問と政治が二つに分かれているからである。

小楠は次に、本当の学政一致とは何かについて、『書経』堯典に描かれている、堯とその家臣が互に戒め合い、議論しながら政治を行っていく開かれた朝廷のイメージに基づいて、次のように答えている。すなわち、真の学政一致とは道を知る明君が出て、一家閨門の父子、兄弟、夫婦の間で互いに「善を勧め過ちを救い、天下政事の得失」<sup>42)</sup>にも及ぶ「朋友講学」<sup>43)</sup>を行い、さらに君臣間でも同じような講学を行って政策を決定してゆくようになることである。小楠にとって、学問とは徳義を養い知識を明らかにするためのものであった。このように朝廷で学政一致の根本が成り立ったときに初めて学校を興すべきであるというのが、学校設立に関する小楠の見解であった。

「学校問答書」は最後に、いくら制度が立派でも人君が君となり師となれるほどでなければ「人才の利政」を生み出す「後世の学校」<sup>44)</sup>になってしまう、学校の盛衰は人君の一心にかかっていると結論している。

以上のように、小楠は「学校問答書」において、越前藩における藩校設立の可否という問題に対し、『書経』堯典における朝廷の在り方を判断基準にして、和漢の学校の歴史やその弊害の実態を考慮し、学校創立の可否に関する原則を明らかにしている。「学校問答書」は越前藩における藩校設立の可否には直接答えていない。小楠の考えは越前藩の儒者吉田悌蔵宛ての書簡<sup>45)</sup>の中で、今藩校の設立は是非止めて時節が来てからすればよい、それまでは君臣間で講学に努めることが大切であると述べられている。

### 第三節 三代理念と西洋文明の受容

「学校問答書」以降、小楠は『書経』に描かれた、堯、舜、禹の治政の在り方を準則にした三代理念に基づいて、流動的な幕末の現実に対処しようとした。しかし、三代理念に基づく政策の内容は、安政2年(1855)47歳の夏に漢文の世界地理書『海国図志』<sup>46)</sup>を弟子とともに精読した後に大きく変化している。

『海国図志』精読の影響は漢詩「田中虎六吾が為に四時軒記を作る。七古一篇を賦し謝と為す」<sup>47)</sup>(安政2年(1855)6月か7月頃)、柳川藩家老の立花壺岐や越前藩の村田氏寿

42) 『遺稿篇』, 4頁。

43) 『遺稿篇』, 4頁。

44) 『遺稿篇』, 5頁。

45) 『遺稿篇』, 168, 173頁。

46) 『遺稿篇』, 224, 242-245頁。

47) 『漢詩文全釈』, 169-174頁。

宛ての書簡<sup>48)</sup> (ともに安政2年(1855)9月), 漢詩「沼山閑居雜詩」<sup>49)</sup> (安政4年(1857)春), 越前藩政の指針「国是三論」<sup>50)</sup> (万延元年(1860)), 談話録である「沼山対話」<sup>51)</sup> (元治元年(1864)秋)と「沼山閑話」<sup>52)</sup> (慶応元年(1865)晩秋)などに顕著に現れている。

小楠がこのような漢詩, 書簡, 政策論, 談話録の中で特に評価した西洋の制度や政策は, 宗教(キリスト教)と政治の一致(政教一致), 人民による大統領選出(特にアメリカ), 議会による国民統合(特にイギリス), 国家による殖産興業, 低い税率, 多方面の社会福祉制度, あらゆる分野で高度に発達した学術などである。

但し, 西洋に対する小楠の評価は次第に厳しくなった。すなわち, 「沼山対話」は一国の利害にとらわれている西洋諸国には心から民を愛し安んずる「本」がなくて「末」の術があるだけである<sup>53)</sup>と, また「沼山閑話」は西洋には心徳の学がなくて事実の学があるだけだ<sup>54)</sup>と批判している。

本論文ではそれぞれの内容に立ち入らず, 『書経』に言及しているもの限定して二典三謨の篇がどのように取り上げられているかを見ておこう。

まず, 安政4年(1857)の春に作られた漢詩「沼山閑居雜詩」は『書経』の「堯典」や「舜典」に基づいて, 堯や舜の治政, 特に禪讓思想や広く人々の意見を聞く開かれた態度を描いた上で, 西洋諸国の政治について, 諸工業を育てて国を富ませ, 税金を安くして農民を苦しめず, キリスト教と政治が一致していると称賛している。小楠は堯, 舜の理想政治と西洋の民衆本位の政治を重ね合わせ, このまま日本が堯や舜のような政治を行わなければ西洋の奴隷になってしまうと憂えている。

このように堯や舜の理想政治に符合すると西洋の政策を評価した小楠は, 安政5年(1858)越前藩に藩校の教授として招かれ, 藩の経済政策にも深く関わり, 殖産興業に努めた。

「沼山閑居雜詩」の思想を越前藩で実地に試した経験は万延元年(1860)に口述された「国是三論」に反映している。「国是三論」は越前藩政の指針として作成されたものであり, 富国論, 強兵論, 士道の三篇からなる。このうち『書経』が言及されているのは富国論と士道の二篇である。

---

48) 『遺稿篇』, 224, 242-245頁。

49) 『漢詩文全釈』, 180-198頁。

50) 『遺稿篇』, 29-56頁。

51) 井上毅傳記編纂委員会篇『井上毅傳 史料篇第三』, 國學院大學圖書館, 1969年, 1-13頁。

52) 『遺稿篇』, 921-929頁。

53) 『遺稿篇』, 906頁。

54) 『遺稿篇』, 926頁。

富国論はまず、外国との通商のみならず治水、土木、産業も含む「交易の道」<sup>55)</sup>が「天地間固有の定理」<sup>56)</sup>であること、堯や舜もこの道に従って天下を治めたことを、『書経』二典三謨の一つである大禹謨<sup>57)</sup>や「虞夏書」所収の禹貢<sup>58)</sup>に言及しながら論じている。小楠は大禹謨の一節を使いながら「・・・政事といへるも別事ならず民を養ふが本体にして、六府を修め三事を治る事も皆交易に外ならず。まず水・火・金・木・土・穀といへば山・川・海に地力・人力を加へ民用を利し人生を厚ふする自然の条理にして、堯舜の天下を治るも此他にだす。」<sup>59)</sup>と述べている。この引用文中の「六府」<sup>60)</sup>とは水・火・金・木・土・穀という生活に不可欠な物であり、「三事」とは、徳を正す「正徳」、物の使用を便利にする「利用」、生活を厚くする「厚生」のことである。

次に徳川家の政治を、民を愛する政治ではなく一家の利害に基づく「便利私営」<sup>61)</sup>であると批判した後に、それと対照的なものとして、アメリカ、イギリス、ロシアを含む西欧諸国の次のような政治を挙げている。すなわち、まずアメリカでは<sup>62)</sup>、ワシントン大統領以来、①戦争の廃絶を願い、②智識を広く世界に求めて政治に役立て、③大統領の世襲を認めないという三原則に基づく政治が続いていること、次にイギリスでは<sup>63)</sup>政府の施策が民に諮り民情に基づいて行われていること（議会制）、ロシアを含む多くの西欧諸国<sup>64)</sup>が学校、病院、幼稚園など設置していることを列挙している。小楠によれば、こうした民のために行われる欧米の政治は古代中国における三代の治教に符合する。

士道の篇はまず『書経』大禹謨における舜を形容した言葉「・・・<sup>すなは</sup>乃ち<sup>すなは</sup>聖乃ち神、<sup>すなは</sup>乃ち

55) 『遺稿篇』、38頁。小楠の「交易の道」の概念は、国内での流通、海外貿易のみならず、生産、生産の奨励も入る、独自の意味で使われている。このことは、源了圓の論文「王道的社会観の大成」(源了圓・花立三郎・三上一夫・水野公寿編『横井小楠のすべて』、新人物往来社、2001年所収)、149-150頁で指摘されている。

56) 『遺稿篇』、38頁。

57) 小楠が敷衍した大禹謨の一節は「徳は惟れ政を善くす、政は民を養ふに在り。水・火・金・木・土・穀惟れ修まり、正徳・利用・厚生惟れ和し、九功惟れ叙すれば、九叙惟れ歌ふ。」という、禹の発言に出てくる、益(堯の家臣)の言葉である。池田末利訳注『尚書』(全釈漢文大系第11巻)、集英社、1980年(以下池田訳注『尚書』と略記する)、545-546頁。なお赤塚訳注『書経』、48、52頁参照。

58) 小楠は禹貢篇についてはその全体を簡単に説明するだけである。池田訳注『尚書』、119-171頁。赤塚訳注『書経』、71-96頁。

59) 『遺稿篇』、38頁。

60) 赤塚訳注『書経』、48頁。池田訳注『尚書』、545-546頁。本文中の「六府」、「三事」の説明は池田訳に従った。

61) 『遺稿篇』、39頁。

62) 『遺稿篇』、39-40頁。

63) 『遺稿篇』、40頁。

64) 『遺稿篇』、40頁。

武乃<sup>すなは</sup>ち文<sup>65)</sup>」を引用し、武も文も元来聖人の「聖徳」<sup>66)</sup>の現れであり源を同じくすることを強調し、次に本来「心法」<sup>67)</sup>から発する文武の本義を忘れ、それぞれの技芸の修得に専心することを戒めている。これは三代の道に基づく武士道のすすめと言えよう。この篇は西洋文明には言及していない。

「国是三論」では小楠は手放しとっていいほど西洋文明を高く評価しているが、前述したようにその評価はその後修正された。

「沼山対話」は元治元年(1864)秋、時習館の学生であった井上毅(22歳)が、越前藩で失脚して熊本に帰っていた小楠を訪ねたときの談話を筆録したものである。この中で小楠は「国是三論」と同じく「大禹謨」の六府三事の一節を引用し、聖人が民のために民生日用の世話をを行い、物産を振興し、機械を作り、多くの生業の道を開いた<sup>68)</sup>と述べている。さらに中国の各地の地理や物産を記述している禹貢篇に言及し、そこでは「有を以て無に換える」<sup>69)</sup>法制の基本が立てられていると指摘している。

「沼山閑話」においても、『書経』大禹謨の同じ箇所が引用され、堯舜三代の聖人は天帝の命を受けて民に恵みをあたえる天の作用(天工)を助けることを心がけた<sup>70)</sup>と述べられ、「畏天経国」と一言で表現されている。これが、小楠の目指した、心徳の学の上に立つ事実の学に他ならない。

以上のように、小楠は30代なかばに堯舜三代の理念を形成し、40代前半には『書経』二典三謨に描かれた堯や舜の経綸を理想とする三代理念を確立した。47歳の年に『海国図志』を読んでからは、確立した三代理念を通じて西洋文明を受容し、民衆のための殖産興業政策を越前藩で実践した。この経験に基づいて越前藩政の方針案を立て、さらには新しい日本の枠組を構想し、幕府に対し幕政の根本的な改革案を建白した。

## 第二章 『書経』における「二典三謨」の篇の特徴

本章ではいったん小楠から離れ、『書経』の中で二典三謨の諸篇がどのような特徴を持っているかを確かめておきたい。

『書経』が編纂されてきた経過は極めて複雑である<sup>71)</sup>。現存『書経』の原本である『孔安

65) 赤塚訳注『書経』, 47, 51頁。池田訳注『尚書』, 544頁。

66) 『遺稿篇』, 50頁。

67) 『遺稿篇』, 50-51頁。

68) 前掲『井上毅傳 史料篇第三』, 5-6頁。

69) 同書, 6頁。

70) 『遺稿篇』, 922頁。

71) 赤塚訳注『書経』, 586-606頁。池田訳注『尚書』, 15-42頁。

国伝尚書』<sup>72)</sup>には、古文献を利用して漢代以降に偽作された偽古文がかなり多く含まれている。このことは清代の学者によって証明され、現在も定説になっている。

このように偽古文は偽作されたものだが、その諸篇も長年儒教の經典とされて重んじられてきた<sup>73)</sup>。前述したように小楠も「虞夏書」の中の偽古文の一つである大禹謨の「六府三事」の一節を思想の拠り所になっている。また『書経』に偽古文が含まれているかどうかは問題にしていない。本論文では区別せずに論じることにした。

『書経』の研究者である赤塚忠や池田末利が、『書経』を構成する諸篇の成立年代を推定したところをみると、その年代は周王朝初期の西周時代から、洛陽に遷都した後の東周前期（春秋時代）、さらに東周後期の戦国時代末期にまたがっている。篇によっては秦や漢代における編集が推定されているものもある。また元のテキストが後代になってから粉飾された可能性も指摘されている。

『書経』は虞夏書、商書、周書の三部から構成される。以下、周書、商書、虞夏書の順に、それぞれの中で特に重要な篇の根本にある思想を明らかにし、その上で二典三謨の位置づけを試みたい。

まず、周書には『書経』の思想的中核をなす、「五誥」と呼ばれる<sup>こ</sup>5篇が含まれる。五誥は、周代初期の王である成王や成王を後見した周公の訓戒や、成王と周公の間答からなっている。五誥に含まれるのは、成王が諸侯や家臣に対して周に対する反乱を討伐する決意を述べたもの（大誥）、成王が殷（商）の末裔である康叔を領地に封ずるときの訓戒（康誥）、成王が康叔に告げた飲酒に関する訓戒（酒誥）、成王が洛邑にも都を置く際に周公が成王を戒めた言葉（召誥）、成王が周公に対し洛邑に留まって治めるように命じた際の二人の間答（洛誥）の5篇である。

以上の五誥について、池田末利<sup>74)</sup>は金文（青銅器の銘）との類似表現が多いことなどから、比較的古い周代の成立と考えられるが後の粉飾の可能性もあると言う。赤塚忠<sup>75)</sup>は康誥について、多くの研究者は西周時代の記述と信じているが、当時の記述そのままであるかどうか疑わしいと述べている。池田も赤塚も五誥はかなり古い年代の成立と考えるものの後世の粉飾を疑っている。

五誥の前提になっているのは天命思想、安民思想である。すなわち、天が民を作り、民のために、徳のある人に天命を下して君として民を治めさせたという思想である。従って

72) 赤塚訳注『書経』, 604-605頁。池田訳注『尚書』, 38-42頁。

73) 赤塚訳注『書経』, 610頁。

74) 池田訳注『尚書』, 274頁。

75) 赤塚訳注『書経』, 222頁。

天を敬わず、民をないがしろにすれば天命を失い、天罰が下る。この例としては、夏の桀王や殷の紂王があり、天命を失って夏王朝や殷王朝は滅びた（革命思想）。天命が継続的に下されるかどうかは民の動向に左右される。周も夏や殷の末期のように不徳な帝王が出て民衆をないがしろにすれば、いつ天命を失って滅ぶか分からない。従って後世の帝王、諸侯、家臣は、前王朝が自ら招いた滅亡を絶えず想起して戒めとし、欲望にふけて民をおろそかにしてはならない。以上が五誥の根本思想である。

五誥が伝えようとしているメッセージには次の二つの側面がある。すなわち、第一に、子孫、一族、家臣に対する戒めとして、周が前王朝の商（殷）を倒した革命の歴史を物語って、天命の危うさを想起させ、身を慎み一族を和合し徳を政治に押し広げて人民を安んずることの重要性を強調する側面と、第二に、商（殷）王朝の末裔や遺民も含む被支配者に対して、商（殷）王朝の不徳、失政を挙げて周による革命を正当化した上で、出征や移住を説得しようとする側面とである。内向けと外向けという違いはあっても、どちらの側面も周王朝を維持するためのものである。

このように五誥は第一に、本来一族の維持、反乱の鎮圧、国内秩序の安定を図り王朝を永続させるという動機で、子孫や家臣を戒めるとともに被支配者に出征や移住を説得するために、成王や周公によって発せられた言葉が書き残されたものと考えられる。しかし、第二にその言葉には、為政者は絶えず天命を畏れ、徳を修め、民を安んじることに絶えず努めなければならないという要請も含まれている。為政者がこの要請を満たすことができなければ、王朝を維持できないという仕方で二つの側面は結び付いている。

池田は「周書」の他の諸篇について、その多くはさらに時代が後になる東周の春秋時代から戦国時代のものとして推定し、周書末尾の秦誓篇<sup>76)</sup>に至っては統一王朝である秦の色彩を認めている。

次に「商書」の成立年代について、池田<sup>77)</sup>は偽古文でない商書のどの篇も殷代に作られたものではなく、周代の西周末期からその後の東周時代に作成されたと推定している。「商書」の中で思想的に特に重要と思われる冒頭の湯誓及び西伯戡黎<sup>せいはいくかんれい</sup>の二篇の内容をみてみよう。湯誓篇<sup>78)</sup>は殷の湯王が夏の桀王を討伐するに際し、殷の衆民に対してかなり威嚇的に戦争への協力を求めた誓言である。天命に基づく、夏から殷への「革命」を正当化したも

76) 池田訳注『尚書』, 533頁。

77) 池田訳注『尚書』, 176, 179-180, 181, 216, 220, 225頁。赤塚は『尚書』湯誓について戦国時代に伝存したことは確かだが、現存の湯誓は戦国時代のものとは同一ではないのではないかと考えている。赤塚訳注『書経』, 107頁。また盤庚篇と高宗彤日篇について赤塚はどちらも殷代のものではないと述べている。赤塚訳注『書経』, 136, 154頁。

78) 赤塚訳注『書経』, 106頁。池田訳注『尚書』, 177-178頁。

のである。<sup>せいはいくかんれい</sup>西伯戡黎篇<sup>79)</sup>は殷の家臣の祖伊がいまや殷の天命が失われそうだと、紂王を激しく責めた言葉である。祖伊は周の文王が黎の国を討ったことを知って、いよいよ殷の滅亡が近いと考え、その原因を、紂王が遊樂に溺れ、民の生活をないがしろにしたことなどに求めている。どちらの篇も周書 of 天命思想、安民思想を補強するものになっている。

最後に、二典三謨の諸篇が含まれる「虞夏書」は赤塚や池田<sup>80)</sup>によれば、東周後期の戦国時代から秦、漢代にかけて、その時代の儒者により古代中国の神話に出てくる堯、舜、禹の伝説を再解釈して創作されたものである。但し二典三謨の内の舜典の一部の文章<sup>81)</sup>及び大禹謨<sup>82)</sup>、五子之歌、胤征は漢代よりも後の偽作とみなされている。

「虞夏書」二典三謨は帝王の為政者としての理想的な在り方を次のように描いている。すなわち、為政者は天を畏れつつ身を慎み、一家、一族の和合を果たしながら、天文の観測、曆の作成、農事への配慮、治水対策、異民族への対処などを通じて民衆の生活を安んじ、善をなす者を誉め、悪を為す者を罰する。但し罰する場合は特に慎重にする（明德慎罰の思想）。良き政治のために諸侯、家臣の意見に耳を傾け、必要であれば子孫や貴族ではなく庶民の中から有能で有徳な人材を選び出し帝王の位を譲る（尚賢思想<sup>83)</sup>、禪讓思想）。

「虞夏書」で何よりも重要な点は、堯→舜→禹と帝位が他姓の有能で有徳な者に譲られていった物語が描かれ、禪讓という王朝交代の理想が表されていることである。

前述したように「虞夏書」の二典三謨の諸篇は戦国時代以降儒者が作成したものと推定されている。この推定が正しければ、当時の儒者は君臣間で率直に討論したり戒め合ったりしながら、人事や政策が決定されていく開かれた朝廷、帝王の位が賢人に継がれてゆくことを理想としていたと考えられる。

ここで「周書」の五誥、「商書」の湯誓及び西伯戡黎篇、「虞夏書」の二典三謨の篇の思想を比較しておこう。「周書」の五誥は前述したように、周の帝王が周王朝を維持するために発したメッセージである。「商書」の湯誓及び西伯戡黎篇は殷王朝の成立と滅亡を示唆する文書であり、五誥と同じく天命思想、安民思想に基づくものである。「虞夏書」の二典三謨は天命思想や安民思想の側面では「周書」の五誥や「商書」の湯誓及び西伯戡黎篇と共通な要素を持っている。しかし、前述したように「虞夏書」の二典三謨は、帝王で

79) 赤塚訳注『書経』, 158頁。池田訳注『尚書』, 221頁。

80) 赤塚訳注『書経』, 6, 57, 63-64頁。池田訳注『尚書』, 52, 84-90, 91頁。

81) 池田訳注『尚書』, 39-40頁。

82) 赤塚訳注『書経』, 51頁。池田訳注『尚書』, 555頁。

83) 虞夏書における有徳で有能な人材の登用論は、戦国時代に流行した、墨子の尚賢思想の影響を受けているという説がある。池田訳注『尚書』, 87頁。小野沢精一「堯舜禪讓説話の思想史的考察」『書経 下』（新釈漢文大系26）、明治書院、1993年、534-551頁。



ある堯や舜が諸侯や家臣の意見を広く聞き、家臣との間で率直に議論して人事や政策を決めてゆく有様が描かれ、必要ならば王朝の維持にこだわらず、血縁関係ではなく徳性と能力によって帝王を選ぶ禪讓思想を説いている。

このように考えれば、『書経』における「虞夏書」二典三謨の特徴を、家、一族の維持という利害を越えた普遍的で開かれた政治理念に基づくととらえることができる。

### 第三章 小楠はなぜ二典三謨の篇を重んじたのか

本章では小楠はなぜ『書経』の二典三謨の篇を重んじたのかという本論文の主題に立ち帰る。この主題には、第一章でたどった、小楠の三代思想の形成・発展の過程と、第二章で考察した、『書経』における二典三謨の特徴とを結び付けることによって、以下のように答えることができる。

小楠が三代思想を形成したのは30代半ばである。小楠は30代半ばの天保13年から14年にかけて(1842-1843)、肥後藩民の窮乏を目の当たりにし、藩による「貨殖の政」の廃止などを内容とする藩政改革論(「時務策」)を起草した。この藩政改革論は孟子の仁政思想に基づいて、藩の財政的利益を追求する政治ではなく民を安んじる政治を主張している。

この時期以降小楠は程朱学(北宋の程顥、程頤、南宋の朱子の学問)を集中的に学び直し、自己の利害のためではなく身を修めるために学問し(「為己の学」)、それによって得られた、明らかな知識と正しい心術を、人を治めることに拡充すること(「修己治人」)、古代中国の夏、殷、周とそれ以前の堯、舜の時代の政治を目指すべきこと(三代の理念)を受容した。以来小楠は民衆の生活を第一に考えながら、実学党の仲間と学問し(「朋友講学」の実践)、藩政改革も行おうとしたが挫折した。

40代前半には、上国遊歴の際の見聞や他藩の武士や儒者との交流、南北朝期の歴史研究(「南朝史稿」)などを通じて、為政者の心の在り方が民衆の生活、世の中の治乱など政治全般を大きく左右することを痛感した。小楠は為政者の理想像を古代中国の神話的帝王である堯や舜に求めるようになり、堯の朝廷における君臣間の活発な議論のイメージに基づいて、為政者と家族との間の講学によって自己修養を行い、その上で為政者と家臣との講学によって政策を決定すべきことを強調するようになった(「学校問答書」)。

小楠の三代理念は堯や舜の精神の在り方の体得を目指し、それに基づいて現実に対処するというようにならざるを得なかった。これが確立された三代理念であり、生涯変わることはなかった。

嘉永6年(1853)45歳の年にペリーが来航した。その2年後小楠は『海国図志』を精読して、欧米諸国における民主主義的な政治体制や経済政策の概要を理解し、今や民を安んじる政治を行っているのは西洋諸国であり、その反対の日本や中国は「夷」の国になってしまっ

た<sup>84)</sup>と嘆いた。前述したように小楠はアメリカ初代大統領ジョージ・ワシントン以来のアメリカに見られる、「権力の地位を子孫に伝えず、平和を願い、世界に広く智識を求めようとする」姿勢に感銘を受け、そこに堯舜の治政に通じるものを見出している。

西洋文明は小楠にとって当初恐ろしいものを感じられた。『海国図志』に衝撃を受けた小楠は儒教の経典や宋代の儒者の書物を読み返し、その中に西洋文明を包摂しうるものを探した。結局『書経』二典三謨に見られる、君臣間で隔てなく活発に議論し、君主が家臣の意見に耳を傾ける開かれた宮廷の在り方、血縁にこだわらず有徳で有能な人物に帝位を譲る禪讓思想、堯、舜、禹による積極的な国土開発特に治水・治山、交易などの経済政策が小楠にとってこれまで以上に重要なものになった。

『海国図志』を精読する前に『書経』二典三謨の政治理念はすでに三代理念として小楠の思想の基軸になっていた。西洋文明に触れたことはむしろ三代理念に対する確信を深めた。欧米諸国が接近する中で、小楠は新しい日本の国是を確立する必要があると考え、西洋の政治・社会制度を取り入れた国是を立案した。その際媒介になったのが、天を畏れつつ、広く臣下の意見を聞きながら民を安んじる政治を行うことが為政者の使命であり、為政者の地位は徳性と能力のある後継者に継承されてゆくべきだという、二典三謨の政治理念である。小楠が『書経』の中で二典三謨の篇を重んじたのは、そこに収められている堯や舜の物語が、西洋文明にも通じる、普遍的で開かれた政治理念を表現しているからであった。現実の中で絶えず生起する様々な問題の解決策はこの理念に従って出された。小楠は孔子や孟子も堯・舜の政治を目指していたと述べている<sup>85)</sup>。小楠も『孟子』から『書経』二典三謨に遡り、そこに表されている堯や舜の理念を幕末の日本で実現しようとしたのである。

小楠は40代前半以降明治2年(1869)61歳の年に暗殺されるまで『書経』二典三謨を重んじ、弟子との講学にも使った。日頃から『書経』二典三謨に親しむことによって、弟子に堯舜の「気象」<sup>86)</sup>を体得させようとしたことが分かる。

## 結論

小楠は30代半ば肥後藩の武士や領民の窮乏という現実を見て、孟子の思想に基づいて藩政の改革を主張した。ほぼ同じ時期に学び直した朱子学に影響されて夏、殷、周とそれ以前の堯、舜時代を理想とする三代の理念を提唱するようになった。但し当時の小楠は模

84) 村田氏寿『関西巡回記』、三秀舎、1940年、35頁。

85) 『遺稿篇』、901頁。

86) 『遺稿篇』、239-240頁。

範とすべき為政者として、堯や舜ではなく、日本で名君とされる大名や中国の諸葛孔明を称賛していた。

40代半ばになると、長年にわたる朋党の病を巡る苦い経験や読書、南朝史の著述などを通じて、世の中の治乱が人君の一心の在り方に左右されることに確信をもつようになり、為政者の心の在り方を何よりも重んじるようになった。この時期に小楠は為政者の理想像を『書経』二典三謨の諸篇で描かれた堯や舜に求めるようになった。

このような変化は40代半ば以降に書かれた「学校問答書」、漢詩、書簡、政策論、対話録などにおいて、堯や舜の治政の在り方が賞賛され、政治行動の基準とされるようになったことに現れている。

『書経』二典三謨の諸篇は堯や舜が臣下との間の率直な議論に基づいて人事や政策を決定し、必ずしも一族、王朝の維持を優先させず、徳性と能力によって後継者を選んでゆく禪譲の物語を叙述しており、普遍的で開かれた政治理念に立脚している。小楠が特に二典三謨の諸篇を重んじたのは二典三謨のこのような特徴によっている。

こうして『書経』二典三謨の普遍的政治理念はペリー来航後、小楠が西洋の民主主義的政治制度や経済政策を撰取する場合の媒介になるとともに、その後の危機的な政治状況に対処する際の思想的立脚点にもなったのである。